随筆

文化の器量

木林一久

学生時代に、空間とちがって反転も鏡映もできない「時間」というものに手こずった経験のあるためか、時とか時間に関係した本をみつけると、中身も見ないで買ってきては積み上げておくのが、私の癖の一つになっている。それがここ十年ほど急に冊数が増え、最近はエントロピーの本も仲間入りして、和洋とりまぜ百冊近くが、書棚の一隅で、不勉強をなじるように埃をかぶっている。

増えてきたのは、七〇年代、高成長にかげりが出て、環境問題、地球は有限、ゼロ成長、ローマ・クラブといった言葉が流行し、そのあげくの果ての石油危機（一次、二次）から今日までのことである。

私の感じでは、アダムの食べた禁断の木の実には、時間という甘酸っぱい汁が含まれていたにちがいない。人間はこれを識ることによって動物と全く違った存在となり、未来を予想しては、善いことや悪いことを仕出かす生物となった。およそ人の悲劇はこれすべて時のなせる業といってよい。お釈迦さまのいう五蓋六処に由来する苦のすべては、時を識ればこその宿命といえる。だから人は、無常を感じたとき、時間をみつめることになるのであろうか。

だから人間は一般に安定指向であり、特に好ましい状況におかれたときはそうである。何か変わったことに出合っても、それは従来の延長線上の出来事と考えたい。よほど突飛なことが起こっても、それは偶発的なもの、いずれ元の状態的な問題だと騒きたてると、多くの場合、その人は時には危険分子ということとなる。

このようにして人間の社会には大きな安定性が付与され、平和も保たれてきた。だが一方で、すべての人が基本的な状況変化を見逃して破局的事態を迎えたという例も枚挙にいとまない。そして不思議なことに、その破局的事態が起きる直前には、ほとんどの場合大多数の人が「明日は今日の通りである」という大合唱を唱えはじめている。……古いユダヤに「満場一致の決定は無効である」という掟があったと聞いて、いたく感銘したという記憶がある。

さて編集者からの御注文もあって、話を何とか経済やエネルギーにつなげなければならない。我々の前にはいま、表面上全く対照的な二つの事態が起こっている。そして二つとも、従来の概念からすれば、日本にとってきわめて好ましい状況が招いた事態である。まずその一つは、安定成長を背景にしたエネルギー需給の著しい緩和と安定であり、日本は石油、石炭、天然ガスの調達をめぐって、引く手あまたにいたく当惑の風情、その上、後発の原子力まで調子がよく、「当分はベスト・ミックスで行こう」などと、十年前には考えられなかった状況の中にいる。原子力のサイクルの中でも、三十年先、五十年先のことを平気で口にする風潮がめだってきた。

もう一つの事態は言うまでもなく、敵化する貿易摩擦（この言葉、とらえ方自体、安定志向からのもののようにも思えるが…）である。石油暴騰時のサウジアラビアをしのぐ勢いの貿易黒字が続く中で、日本への欧米からの厳しい批判は、不公正、市場開放といった経済面の要求から、働きすぎ、貯蓄しすぎ、団結しすぎ、はては外国語が通じないとか、エスカレートする一方。批判の大部分は、従来のルールからすれば理不尽な言いがかりであるし、第一、そのとおりにしても事態が「改善」する見込みはあまりないのだが、要するに米国だけで三百億ドルの黒字などというのは、「理屈じゃなくて悪いこと」という合唱が起きている。要するに、この事態をつづめていえば、黒字を逆手にとった黒船が、日本の文化の本丸にまで攻め込んできているということである。

この小文の起承転結からすれば、この二つの事態には基本的変革の予兆が含まれていると言わなければならないし、また、実際私には最近そのようにも感じられる。危険分子視されないよう用心して言わなければならないところだが、二つの事態に共通していえることは、わが国の文化が、今日の格段に進歩した産業や技術をつつみこんだ上で、世界に対し普遍性のある「文明」に果たして脱皮しうるかどうかの、その前夜にあるのではないかということである。

「文化」ということには、当然それに固有の時間なども含まれるわけだが、今後、我々の努力は日本文化の器量を磨く仕事に捧げるほかないと思われるのである。

（森一久　日本原子力産業会議専務理事）

その去年暮さんのなかなかの話で、カナダで全天周立体映画の実験に成功したらしいという話が入りました。しかし最初に説明を聞いてもそれがどんなものか全く分からないといった状態でしたし、

□ 技術的メドつけ

――それはいつごろの話ですか。

「二年半前ぐらいです。ですから準備に三年かかるとすると、当年くらいでメドは、と期待しています」

CGに適したハードウエアのシステム構成とそれを動かすためのソフトウエアの開発がまず取り組まれました。とにかく立体映像を体映像システムを開発したアイドームに映して、ちゃんとゆがみクロまでの世界をえがいたわけですが、こうしたテーマは全天周立ックス社が十年前から考えていたストーリーとたまたま一致したも心配でしたが、土星の環が立体的に見えた時には本当に感激しました。それから七十ミリフィルムの『オムニマックス』に焼きつけて、遊園地